

# DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

ダイバーシティ  
イン・アーツ  
ペーパー・プロジェクト



## FEATURE

### 音の生まれるところ

02 | 心地よい「不揃いな音」が  
できるまで

しょうぶ学園 otto & orabu

10 | 音とアート

寺尾紗穂 / XMËA

音遊びの会 / 東京国際ろう映画祭

15 | ART GALLERY

鶴木二三子 (しょうぶ学園)

大竹明・永瀬洋昌 (友愛学園)

鈴木涼太郎・半澤真人 (studio FLAT)

22 | イッセー尾形の妄ソ—芸術鑑賞

06



# 音の生まれるところ

FEATURE

特集

1

心地よい「不揃いな音」が  
できるまで

〈しょうぶ学園〉「otto & orabu」

ろうの方が手話で教えてくださいました。  
「私たちも音のある世界に生きている」  
そう。聞こえる、聞こえないは関係なく、世界は音で溢れている。  
なにかを生み出す時、音も一緒に生まれます。  
音の生まれる場所は、なにかが生まれるところ。  
すべての人は音に囲まれて生きている。  
PAPER06号では音が生まれる場所と  
生まれてくるアートを集めます。

演奏が始まった瞬間、場の空気を変え、  
音と一体になるかのような恍惚感を生み出す力が、  
ときとして音楽にはある。  
障害者支援施設〈しょうぶ学園〉の  
利用者と職員で構成される「otto & orabu」は  
そうした力をもつパフォーマンス集団だ。  
このエネルギーはどのようにできあがるのだろうか。  
鹿児島県の〈しょうぶ学園〉を訪ねた。

文・岡田カーヤ 写真・大沼ジョージ

「otto & orabu」で多く使われるのは打楽器や民族楽器など、  
叩いて音の出る楽器、西洋音階ではない楽器など。ドラム缶  
ドラムには〈しょうぶ学園〉利用者による作品が描かれる。





1

## 僕らの「正解」って、エネルギーが来たときのこと。 エネルギーは激しいばかりじゃない。 小さい音でも、ハートが来たときがいいの。

—— 福森伸 「otto & orabu」 指揮者／〈しょうぶ学園〉統括施設長

### 会話のようなやりとりで静と動を行き来する

「今日は約2ヶ月ぶりの練習ですね。みなさん覚えてますか?」。鹿児島県にある障害者支援施設〈しょうぶ学園〉の施設長で「otto & orabu」の指揮者でもある福森伸さんの問いかけから、練習は始まった。取材した7月上旬のこの日は、8月末の本番に向けた練習の初日。お互いのリズムや気配を確認しあうように音を重ねていった。

「otto & orabu」は福森さんいわく「スーパー素人集団」。「otto」はパーカッショングループで、メンバーは利用者と職員の23名。鹿児島弁で「叫ぶ」という意味をもつ「orabu」はコーラスグループで、8人前後の職員で構成される。

演奏が始まると、リラックスした雰囲気の中、飛び跳ねたり、手を動かしたり、周りを気にせず感じるままに体を揺らす。そうせずにはいられないのだろう。音を聴くこと、演奏することをまっすぐに受け止め、楽しんでいるのが伝わってくる。

福森さんの指揮は、そんなみんなと会話をしているかのような感じ。向かい合いは真剣勝負。そのくらいの気合いとともにメンバーたちへ、音楽以

上に音楽的な表現で思いを伝えると、それに合わせて大きい音、小さい音、流れるような、とつとつとしたような音が、思いおmoiの身体表現で返ってくる。そんな息の合った応酬の中で、いろいろな色彩を帯びた音が混ざり合う。そして、生き物のように静と動の世界を行ったり来たり。音自体が命をもっているかのようにうごめきだす。そんなパフォーマンスを見ていると、演奏している人の誰が障害者でない健全者かわからなくなるし、区別する必要なんてないよねと思えてくる。

### 信頼関係から生まれる「音のエネルギー」

曲と曲の間には、新メンバーの名前当てなどクイズやゲームが行われた。

「さあ、今日、取材に来ているカメラの人は、どこから来たでしょう。1番北海道、2番大阪、3番東京」

「2番大阪!」

「ぶぶー、違いーす」

というようなやりとりが繰り返され、1問ごとに笑い

が起こる。間違っても明るく受け流してくれるから、みんなの気持ちが和んでいって、コミュニケーションの密度が高まっていく。こうした信頼関係があるから、メンバーは福森さんの指揮を読み取ることができるし、間違いを恐れず音を出すことができるのだろう。

「今日は、軽めの練習でした」と、練習が終わったあと福森さんはいう。もっとしっかりやるときは、途中で演奏を止めて、やり直しをすることもあるという。どんな「正解」を求めてやり直しをするのか、福森さんの中の基準を知りたくて質問してみると、「すごく良かったからもう一回」という「良かったこと」の確認がひとつ。もうひとつは「その人なりのパワーがでていなかった」ときに、やり直しをすることが多いのだという。

「僕らの“正解”ってエネルギーが来たときのこと。エネルギーは激しいばかりじゃなくて、小さい音でもハートがあれば、それでいいの」

こういう考えがあるからこそ、演奏する人も聴く人も、感じるままに音を楽しむことができるのだろう。それって音楽の理想の形のひとつじゃないかなと思う。



2



3

1 会話をするかのように音を紡いでいく〈しょうぶ学園〉施設長、福森伸さん。2 音を受け止めながら、自分の体の延長であるかのように楽器を演奏する「otto」のみなさん。その姿からは音楽を聴くこと、演奏することの楽しさが伝わる。3 曲の練習の合間には名前当てゲームや手品が行われ、みんなの集中力を高めていく。



4



5

4 無目的に叫ぶ「orabu」は新人職員の登竜門。今年の新人はこの日が初練習ながら堂々たる叫びぶり。5 「orabu」の歌詞に意味はない。普段パソコンにさわからないベテランの給食調理師が「た」のためにキーを叩いたものが歌詞となったこともある。6 キレのある踊りをみせる小松尾彰さんによるブリッジ。

6



6





「otto & orabu」のこと説明してあげるよ。  
 ボンボ担当の記富久さんが言った。  
 叫びなんだけど、その声を丸くして、  
 噴煙のように表すのがotto & orabu。  
 奇跡が呼び起こす、がたがたがたという、  
 この表現ができて、雰囲気が変わって、  
 森の妖精たちが寄ってきて叫ぶ。  
 それをつなぎ合わせて、  
 水の声とか、虫の声とか、いい香りが漂ってきて、  
 それで人間たちが、森のなかで叫ぶような感じで、  
 きこりがやってきて働くようなかたちで、  
 元気でやるようなかたち。

## 「otto & orabu」 メンバーたちの日常風景

リハーサルのあとは、いつもの持ち場へ。  
 自分のリズムを楽しみながら、  
 今日も元気に働いています。



竹製木琴をニコニコしながら演奏する中田さんが「土の工房」で製作するのは、細部まできれいに成型されたリズミカルな作品。「まみちゃん、なにつくってるの?」と職員が尋ねると「脚」という返答。

バンパー・ギター担当  
 なかたまみ  
 中田麻美さん

堂々たる叩きぶりのボンボ奏者、記さんは「木の工房」所属。いろいろな角度にのみをあて、迷いなく木槌をふりおろしてある程度形ができたなら、職員が器に成型して販売。丸太一本を彫って着色したアートも作成。

ボンボ担当  
 きとみひさ  
 記富久さん



小太鼓担当  
 よしもとこうせい  
 吉盛眞世さん

両手をクロスさせたキメポーズでリズムをとる姿が印象的な吉盛さん。所属する「和紙/絵画造形の工房」で描くのは、民族画のようなプリミティブさを感じる空想の魚。この魚の名前は「ブラックホールアイス サンダーシャーク」。

軽やかに踊りバイオリンを弾き鳴らす小松尾さん、なんともうれしそうなお表情でジャンベを叩く関さんはともに、学園内にある「そば屋凡太」に勤務。小松尾さんはクールに、関さんは歩く姿さえ楽しそうに、配膳や洗い物をこなしている。

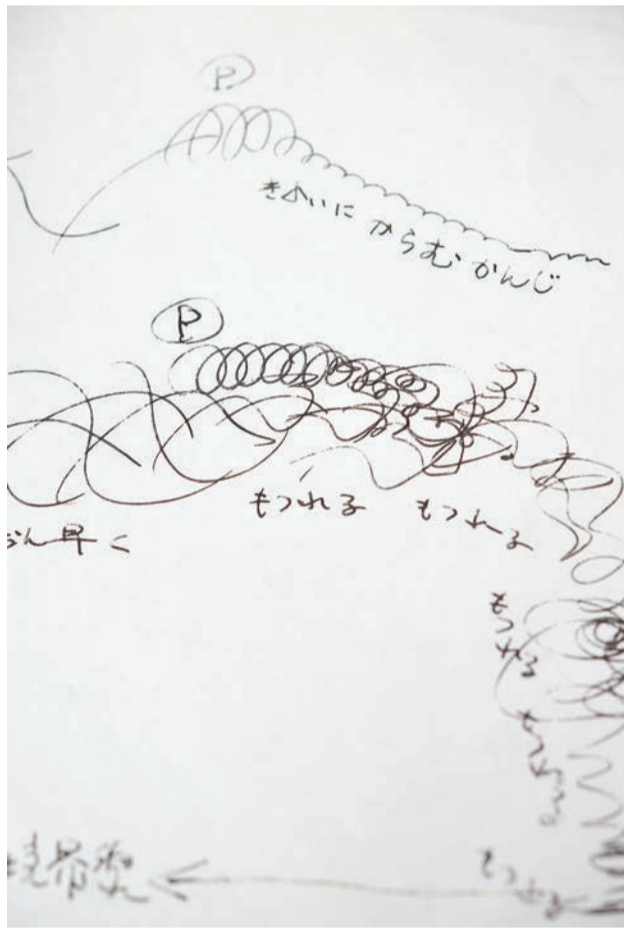
バイオリン・ダンス担当  
 こまつおあきら  
 小松尾影さん（写真左）  
 ジャンベ担当  
 せきなおつぐ  
 関直継さん（写真右）



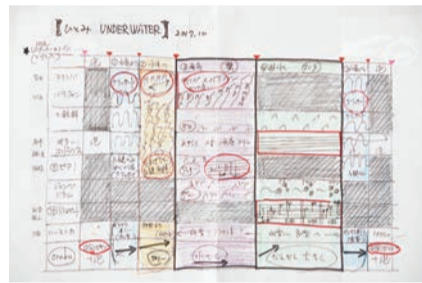




1



2



3

1 (しょうぶ学園) 施設長室。入口の「？」には、「正解はなにかわからない。もっと自由に考えたい」という思いが込められている。2,3 「otto & orabu」の曲は、福森さんが思いついたフレーズやイメージをふくらませたものに、セッションで生まれたフレーズなどを組み合わせて曲をつることが多い。2は「糸のもつれ」を想像してつくられた曲の楽譜。4 (しょうぶ学園) の朝は、園内を掃除したあと、ラジオ体操を行う。そのやりかたは、みんなそれぞれ。



4

# Birth of otto & orabu

## 「otto & orabu」という民族の音楽ができるまで

## ～新たな価値観と多様性を生み出す

「otto & orabu」の誕生は、(しょうぶ学園) のものづくりの歴史と完全にリンクしている。

現在、学園では布、木、土、和紙／絵画造形などの工房があり、利用者の個性を活かして、アートやクラフトを製作。展示・販売を行っている。

特徴的なのは、傷がつけられた木、破れた布、はみだした色など、通常だったら規格外となるものを組み込んだ製作を行っていること。

「ソツソツにする方法を教えるより、ギザギザが得意だったら、それを活かす方法を僕たち職員が考える。ギザギザの板なら、酒膳をつくれれば酒がおいしく飲めそうだというように、職員が知恵を出し、創意工夫するというものづくりの方法へ変えていったんです」と福森さんは振り返る。

「職員自身が何を作るか」を考え、実践していくことも(しょうぶ学園) の特徴だ。

「職員自身が木工や陶芸の技術を得て作ったものに、利用者が絵を描いて色をつける。利用者は

訓練して何かを達成することを目標にするのではなく、持っているものをそのまま出す。職員は知識と訓練によって身につける方法が得意だからそれを活かす。その組み合わせが“しょうぶスタイル”。その中で、組み合わせられないものは、アート作品になるし、職員だけの作品もある」

### ものづくりと同じ発想で生まれた新しい音

2001年に結成された「otto」も、こうしたものづくりの方法論と同じ発想から生まれた。「不協和音やずれたリズム」を訓練して正確性を求めるのではなく、ずれたリズムを活かして、職員と一緒に新しい音楽を作ることを思いついたのだ。

楽器といえば、ピアノの鍵盤をグーとパーで叩くことだけという福森さんは、当初「自分に音楽はできない」と思いこみ、ピアノ講師を招いてさまざまな方法を試した。

マイルス・デイヴィスをかけながら、利用者が太鼓を叩くとめっちゃくちゃかっこいいけど、利用者の太鼓だけになると、自由すぎて聴けなくなる。だったら講師のピアノと一緒に合わせたらどうかと試したら、盛り上げ方次第でさまになる。高揚するタイミングや息の合わせ方をピアノ講師へ指示しているうちに、日常的に障害のある人たちと接して、どうしたら彼らの注意をひくことができるかを知っている福森さんが指揮をするようになった。

「最初は猛烈に恥ずかしかったですよ」と福森さんは苦笑する。「やっていくうちに、音楽であり、芝居であり、身体表現だと思えるようになった。普段どおりの利用者たちのシーンがそこにあったんです。たとえば、みずたまりにたずみ、びちゃびちゃと遊んでいる人、工房で板に傷をつける人、園内のどこかでぎゃーと叫ぶ彼らの日常が、舞台の上にも現れた。すると、その音や姿をきれいだと思うし、傷つけた板を美しいとも、ぎゃーとあげる叫

び声も、いい声だなと思えてきた。「otto」と一緒に演奏していくうちに、それまでの教育で得てきた価値観は、一気にリセットされた。「なにがよい音で、なにが美しいか。その感覚が変わってきた。ロックを聞き慣れない老人は、ギヤーンというひずんだギターは不快でしかないけど、若者はかっこいいと思う。そのくらい感じ方には違いがあるから、いろいろな音があっっている。「ドレミ」の次は、必ずしも“ファ”じゃなくてもいいのだからね」

それはまるで、民族が新しい音楽を生み出しているかのように思った。ときに儀礼的に、ときに楽しむために、自分たちのための音楽を演奏している。その音からは、人々の習慣や生活、働き方や暮らし方が垣間見える。

### 音楽が価値観を変えるスイッチになる

職員だけのコーラスグループ「orabu」が結成されたのは、「otto」結成の5年後。「利用者に挑戦させているのなら、職員も挑戦してほしい」という福森さんの思いにより作られた。以後「otto & orabu」は、パーカッションと無目的に叫ぶコーラスという現在の形で活動を続けている。

最初の頃は、職員と利用者の立場が逆転する状況が本番前によく起こっていたという。「成功させなきゃというプレッシャーで、“緊張という障害”を職員が受けていたんです。その横で利用者たちは、普段どおり楽しそうにしている。今ではだいふ利用者に追いついて、職員も楽しめるようになりましたね(笑)。

一見、セッション的に思われることが多い「otto & orabu」の音楽だが、決して自由な音楽ではないと福森さんはいう。ずれたり揺れたりするリズムを矯正することなくグルーブとして感じられるよう、

ルールにのっとってバランスを保ちながら、ひとつの世界をつくりあげているからだ。

利用者だけでは音楽にならない。かといって、職員だけでやってもおもしろくない。そのどちらもがいて、多様性のなかで補い合っているからこそ、一気に新しい世界が開けてくる。

そんなことを考えながら「otto & orabu」のパフォーマンスを見ていると、彼らの音楽は“違う世界”を垣間見るための装置のようにも思えてくる。彼らの演奏には、みずたまりの澄んだ水音や、傷つけた木の美しさを感じ、誰かと比べることなく純粋に音が楽しいと気づかせてくれる力がある。音楽が私たち一人ひとりの価値観を変えるスイッチにもなるのだ。

《しょうぶ学園》  
鹿児島県鹿児島市吉野町 5066  
電話：099-243-6639 <http://www.shobu.jp/>



世界は音に溢れている。音は人の喜びと結びつき「音楽」になる。音楽家、DJ、ビッグバンド、映画作家に「音」にまつわる話を聞いた。

# 音とアート



## 1 寺尾紗穂 音楽家・文筆家 TERAO Saho

音楽家、文筆家。東京生まれ。2007年『御身』を発表。伊賀航、あだち麗三郎と結成したバンド「冬にわかれて」も始動。現在、CM音楽制作、ナレーション、エッセイなど、活動は多岐にわたる。近著に『彗星の孤独』（スタンドブックス）があり、新聞やウェブなどで連載を持つ。朝日新聞書評委員も務める。

# 路上に生きる人たちの踊り、そこから生まれる感情

寺尾紗穂さんのライブに、時折路上生活経験者らによる舞踏グループが登場する。

「人が死んだ時、魂は彼らのように舞うのかもしれない」と彼女は言う。  
寺尾さんの音楽に寄り添い、共鳴し合う踊りと、そこから生まれるものとは。

文・井上英樹 写真・高橋宗正

ピアノの調べに乗せて歌声が届く。声は細かいようで、力強い。ワンフレーズごと、心に歌詞が置かれていく。その言葉の蓄積がひとつのイメージとなって、身体の奥深くに染みこんでいく。寺尾さんは音楽活動以外にも、ルポルタージュやエッセイなどを手がけている。2018年秋に上梓したエッセイ集『彗星の孤独』には、時折「ソケリッサ！」が登場する。ソケリッサとはダンサーのアオキ裕キさんと、路上生活経験者らによる舞踏グループだ。『楯円の夢』のミュージックビデオには、そのソケリッサが出演する。おじさんのダンスが、寺尾さんの歌声と重なり合う。鍛えられていない肉体（ダンス的には）のおじさんたちが、厳しい社会の波にもまれた彼らのダンスを見ると、不思議な感情がわき起こる。寺尾紗穂さんに話を聞いた。

——ソケリッサとの出会いは？

ソケリッサを知ったのは『ビッグイシュー』（ホームレス状態の人が販売する雑誌）で、ソケリッサが紹介された記事を見たんです。「あ、この人たちなら絶対に面白いな」と思って。それで、ソケリッサに（りんりんふえず）（寺尾さんたちが主宰するイベント。ライブだけでなく社会問題に関するディスカッションなども開催される）に出てもらうことにしました。でも、予想と全然違った。おじさんが踊るわけだから、ちょっとコミカルな感じがあるのかなと思っていました（笑）。だけど全然違いましたね。ソケリッサを見ているうちに、自分を見ているような気になったんです。彼らは決して洗練されてはいません。が、精一杯踊っている様が、もがいている感じに見えた。場面によっては「死んだ人の魂って、こんな風に動いているのかもしれない」と感じたりも。……私にいろんなものを思い起こさせてくれる踊りでした。そして、訳もわからないけれど、涙が出たんです。彼らがホームレス経験者であるから涙が流れるのだろうか、と考えました。それはあるかもしれないけれど、そういうステレオタイプな見方を越えたところに彼らの表現の面白さはあるように思えました。それだけ、自由なインスピレーションが私の中に浮かんできたのです。

——ソケリッサのダンスは、寺尾さんの音楽にも影響しますか。

ピアノをひいている時はダンスには集中できないので。そんなには見ないんです。映像を見て「こんなだったんだ」と思うことはある。でも、明るい曲の時におじさんたちがすごく近くに來たりする

と、楽しい気持ちが増えます。笑わないように歌わなきゃと（笑）。

——ライブを見ていると、ダンス、歌、演奏の要素がミックスした不思議な相乗効果があるなと思いました。寺尾さんの著作『彗星の孤独』の中に「日本では、どこかひとつの道をきわめてこそ、という職人至上主義のような考え方があるのか、二足のわらじは中途半端に見られたり、好奇の目にさらされたりする」という言葉がありました。ご自身の立場を指した言葉でしたが、いわゆる「ダンスの教育」を受けていないソケリッサにも重なり合うようにも見て取れました。プロフェッショナルなダンサーとソケリッサの間にはなにか違いを感じましたか？

踊りに関して言うと、プロフェッショナルになってしまうと、あまりにも型がきちっとしている、そんな印象を覚えます。クラシックバレエの世界などはそうですね。常日頃から身体を鍛えて、柔らかくしておくなど、そもその前提が違う。ソケリッサを見ると、彼らは彼らなりにストレッチをしていたりしますが、あんな太った身体のおじさんたちは、やっぱり世間が考えるところの「プロフェッショナル」ではないですよね（笑）。身体というスタートから違っている。だからでしょうか、踊りの作り方もすごくユニークだと思います。ソケリッサと舞台に立つ時、演出のアオキ裕キさんが、前もって準備をしてくれます。アオキさんが私の音楽を聴いて、思い浮かべた単語を紙に書く。たとえば、「太陽の周りを回る」とか「月を飲み込む」とか。そういった不思議なフレーズを書いて、それをおじさんたちに見せる。そして、「こんな感じかな？」と、おじさんたちが踊る。ダンスはそんな作り方をしています。だから、創作ダンスの一種ではあるんですが、作っているのはアオキさんなのか、おじさんたちなのか、本当にわからない。すべてが混じり合っているんです。

——即興ではなく、寺尾さんの音聞き、そこから言葉を取り出して、その言葉をモチーフに踊る。そんなやりとりがあって生まれているのですね。

そうですね。最後になって「みんな、即興でやりましょう！」ということもあるんですが。基本はかなり作り込んでいるんですね。ただ、そのおじさんからしか出てこないだろうという、本当にユニークな動きがそれぞれありますね。

——たしかに、見たことのない踊りでした。全世界共通のプリミティブ（原始的、素朴）な動きをおじさんたちから感じました。

そうですね（笑）。でも、公演後のアンケートを読むと、“おじさん”が拒否反応を示すことが多いんです。ソケリッサと共に全国ツアーを回った時、女性客のほとんどがダンスに対して「素晴らしいかった」と反応してくれていました。しかし、おじさんの中には「あの踊りはいらなかった」と書いてくる人がいて。頭が固いんだと思うのですが（笑）。「あんな身体を見せられても」「ダンスとは鍛え抜かれた身体の人踊るもの」「おじさんの身体は美しくない」。きっと、そういう固定観念があるんでしょうね。……その部分を崩せないと、ソケリッサのダンスは、“おじさんたち”には受け入れられないようですね（笑）。

——たしかに、日本は「プロフェッショナル」と「アマチュア」の線引きが好きのように思います。寺尾さんの歌と、ソケリッサのダンスを交えた公演は、そこをうまくはみ出している気がする。「はみ出す」というのも、寺尾さんのメッセージなのかなと思ったのですが。

うーん。狙いとかはないんですけどね（笑）。ただ頭の片隅に、そもそも門付け芸などの芸能を担ってきた人達は社会の底辺の人たちだった、ということはありません。はみだすも何もうごく複雑なところから芸というものが生まれてきていますよね。ただ、私自身の中では路上で暮らす人というのが、出会って以降、大きくなっていったので、そういう人たちと一緒にいかに生きてきたら面白いなと思ったんですよね。私の本や歌に山谷の絵描き、坂本久治さんが登場します。彼はずっと日雇い労働者で、私が通っていた都立大の校舎を建てたおじさんでした。台東区にある公園の夏祭りで出会ったのですが、坂本さんは腰を痛めていて、生活保護を受けていました。その後、絵を見せてもらったりする関係になりました。2008年に交通事故で亡くなってしまったのですけどね。（りんりんふえず）は来年で10回目を迎えます。今回は坂本さんと出会った山谷の玉姫公園で3月29日に開催できる事になりました。山谷はいろんな福祉団体などが継続してやってきた場所です。そこでユニークなものがたくさん生まれています。様々な団体を巻き込んでお祭りができたらと思っています。





## 2 / XMĒA DJ エックスメア

文・中村悠介 写真・井上嘉和

### クラブには日常とは違う人間関係がある

京都に車いすに乗り、呼吸器を付けたDJがいる。その名はDJ XMĒA（エックスメア）。本名はライス趙ノアという。彼にはX連鎖性ミオパチーという世界でも稀な遺伝性の筋肉の病気がある。彼のDJ活動、そして京都のクラブMETROで主催するイベント「CANVAS」について話を聞いた。

— DJ活動のスタートはどういった経緯で？

親の影響で音楽が好きだったので、いつも部屋で音楽を大音量で流していました。あるときヘルパーさんが「DJをやってみたら？」と提案してくれました。その人、ヘルパー以外にDJもやっていたんです。DJデビューしたのが5年前で、漫画を描く兄（ライス・チョウ ジョナさん。彼もまたノアさんと同じ病がある）も同時期にMETROでライブペインティングをはじめました。

— DJのきっかけは「音楽が好き」以外になにかありますか？

もともと僕は性格的に人と交わるのが好きなタイプで、好きな音楽を通じて自分を知ってもらうことに魅力を感じたからです。クラブには日常生活の人間関係とは違うベクトルがあるように感じます。日常生活では、僕ら兄弟の印象は「車いす」でしょう。僕は呼吸器を付けているので「喋れるのかな？」なんて思われる。そんなイメージを持たれることが少なからずあるんです。でもクラブではま

ず音楽を通して自分を知ってもらえますね。何も知らない人は、呼吸器で車いすのやつがDJしてたら、ビックリするでしょう（笑）。でも、DJを聞いて「こいつ、意外にやるなあ」って思わせたいんですね。いつもイベントに集まる人たちは、もはや僕の車いすや呼吸器は関係なく、あくまで「DJ」や「アーティスト」として僕らを見る。だから（障害があるがゆえのDJスタイルを）期待されてもなんにもないんですけどね（笑）。

— 車いすでクラブに入ることに困難は？

METROのスタッフは最初から理解してくださるので不便はないですね。実際、車いすの方もけっこう来てくれる。ずらっと車いすが並んだこともあった（笑）。でも「障害のある方は来てください」ではなく「誰でも来てください」というスタンスなんです。音楽とアートが好きだったら誰でもいい。障害のあるなしは関係ない。前回は、全盲のアーティストに出演してもらったんですけど、そのことは僕の口からは誰も伝えなかった。「たまたま全盲」ではあるけれど、素晴らしい表現者であれば、ほんとに誰でもOKです。

— DJ名はXMĒAだけではなく、ノア・ベイダー名義もあるんですね。

最初からXMĒAなんですけど、ある人に「君は（呼吸器が）ダース・ベイダーみたいやから、

1995年生まれ。京都市在住。DJ XMĒA（エックスメア）として2014年にキャリアをスタート。京都のクラブMETROで音楽とアートが渾然一体となるイベント「CANVAS」を主催する。兄のライス・チョウ ジョナもライブペインティング活動を行っている。

文・中村悠介 写真・井上嘉和

DJノア・ベイダーや」と。自分としては「お、おう……」という感じではあったんですが（笑）。ノア・ベイダーでプレイすることもあるけれど、普段はXMĒAですね。XMĒAは、僕たち兄弟の病気の原因遺伝子の名に由来しています。シンプルにかっこいいので名前に使いました（笑）。

— 「CANVAS」というイベント名については？

深い意味はなくて。後で気づいたんですけど、いろんなDJやアーティストが集まって、そこにお客さんが集まって。みんな違った自分らしい「色」を持っていて、それが混じり合ってまき散らされることで「CANVAS」が完成するという意味です。それと、実は隠れたコンセプトがあります。「違いをアートにする」ということです。アートの世界では他の人と違うからこそ価値がありますよね。DJやアーティスト、お客さん、それぞれ違うことに意味がある。僕はそう思います。

— 今後の目標を教えてください。

ゆくゆくは「CANVAS」自体がクラブイベントの枠を超えて、コミュニティとして大きくなってほしいですね。これをきっかけにコラボレーションが広がったりすると嬉しいです。お客さん同士が仲良くなったり、ここで見たアーティストの作品を買ったり。「CANVAS」がひとつのプラットフォームのようになってほしいですね。

## 3 / 飯山ゆい 音遊びの会 IIYAMA Yui

### 音で生まれるコミュニケーションを大切に

その場には「なんでもあり」と「ありのまま」が溢れるという。神戸で活動する、音遊びの会は知的障害者も参加する音楽プロジェクトだ。音楽家の大友良英さんなどとの共演でも知られる音遊びの会とはどんなプロジェクトなのか。拠点である兵庫区和田岬で、代表の飯山ゆいさんにお聞きする。

— 音遊びの会、そのプロジェクトとは？

障害のある人となない人が一緒に即興演奏をする「場」です。ですがバンドという意識がだんだん強くなってきて、即興演奏をする音楽バンドと言ってもよいですね。でも50人ものメンバーが関わっているの、意識はそれぞれだと思いますね。

— 飯山さんは途中で音遊びの会の代表を引き継がれたんですね？

立ち上げたのは神戸大学のゼミの先輩の沼田里衣さんです。当時、私は彼女の音楽療法セッションの手伝いをしていました。私はもともと音楽大学でクラシックピアノを勉強していたんですが、その後、音楽療法を勉強したくて神戸大学に入ったんです。だから私にとって、音遊びの会の母体となった「音遊びプロジェクト」のワークショップは大学で勉強していることの実践を見せてもらっているという感じで。まだ学生だったので手探りでしたね。そのプロジェクトは半年で終了する予定だったんですが、その間に2回の公演を開催して、

それがとても楽しかったんですね。参加した子どもたち、その保護者から続けて欲しいと声があって。そのまま14年が経ちました。

— 発足当時から変わらないテーマは？

「教えない」という考え方は共通理解としてあります。当時のワークショップは、子どもたちとまず鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたり。そこから一緒にみんなで音楽をしよう、と誘っていく流れで。鼻歌でもいいし、ボールを投げて当たった時の音でもいいんです。そういう風にみんなで即興で演奏する、と。私自身、ここに関わる前は、障害のある人の音楽を特別面白いと思ったことはなかったんです。でも言葉がない人でも、言葉じゃなくても通じるものがありますし、言葉がある人は誰かと一緒に演奏したい、というような音楽を通じてのコミュニケーションが生まれてきたり。音を介したり、介さなかったり様々なやり取りと、互いの関係性が大切で。そこが面白いところですね。

— 「なんでもあり」と「ありのまま」を掲げられている、とはいえ音遊びの会ならではの、特徴は？

活動を続けていると、だんだん色が出てきて。なんとなく「これは音遊びの会っぽい」とか「そうじゃない」とか。けれど、それが限定されてしまわない理由はメンバーの多さにあると思っています。50人もいると、演奏途中で誰かがトイレに行っ

2005年に神戸で発足した音楽プロジェクト、音遊びの会代表。音遊びの会は、知的障害者を含む総勢50名のメンバーで即興演奏を基本とし、月2回のワークショップ、そして全国各地でパフォーマンスを行っている。現在の活動拠点は兵庫区和田岬。

文・中村悠介 写真・井上嘉和

てたり、「会場が自分に合わない!」と出て行く人もいます。それは障害のある人だけでなく、参加するプロのミュージシャンもそうで。みんな同じ（笑）。障害者をときに「マイノリティ」だと言いますが、ここでは全然マイノリティじゃないですよ！

— メンバーの演奏楽器の分担は？人気の楽器は取り合いになったり？

ドラムは人気です。音が大きいからかな。打楽器は人気ですけど、鳴らし方もそれぞれで。炭酸をバケツに注いでその音を聞いたり緩衝材のプチプチいう音を楽しむ人もいます。表現のスタイルを限定しないように、と思っています。

— 飯山さんが考える音遊びの会の展望とは？

50人のメンバーそれぞれがやりたいことがあるので、私はそれをなるべく排除せずに、できるようにする役割。カラオケがしたいメンバーもいるし、実験的なことがしたいメンバーもいて、本当にバラバラなんですけど、それが音遊びの会を作っているのかなと思っています。だから、すぐ面倒くさい会なんです（笑）。みんな辞めないからメンバーは増えていく一方ですし、私が脱退したくらい（笑）。でも続けているのはやっぱり面白いからなんです。なにが起きるかかわからない演奏、そこに尽きるかなと思います。いろんなところで音遊びの会を見ることができたらいいなと思っています。







# 4 / 牧原依里

## 映画作家・東京国際ろう映画祭代表

### MAKIHARA Eri

## それが本当に「音」なのかは定かではない

手話は「文化的な1つの言語」という牧原依里さん。ユーロライブ（東京）で行われた「第2回東京国際ろう映画祭」では、ろう者の視点で厳選した世界中のろうにまつわる多彩な映画が上映された。映画祭の代表を務める牧原さんに手話通訳を介してお話を伺った。

——今回の映画祭のテーマ「可能性」の意味は？

技術が発達し、聞こえる人に近づける身体にすることが夢物語ではなくなった今、ろうの世界では、「ろう者というアイデンティティを持つ者は聴文化をどう受け入れたら良いのか」といった混乱の渦中にあるように思います。最近になりダイバーシティ（多様性）という考えが、世間に広まってきました。私たちは、そこに「可能性」を見いだしました。しかし、可能性はいい意味だけではありません。悪いことも同時に含まれている。そして、私たちは「なにがいい」か「悪い」かを決められる立場にはありません。人によってその見方も変わってくるのですから。それも含めて可能性なのです。つまり、どのような生き方をしていくのかという選択は一人ひとりに委ねられている。可能性とはコインの表裏一体。私たちはそんな世界に生きているのだと思います。

——ろう者、耳の聞こえる人も共に楽しめる映画祭でした。

私はろう者なので、映画を選ぶ際に、ろう者の立場から「考えさせられること」「気づきがあること」「自然であること」に注目して作品を選んだつもりです。それは映画として見た場合、ろう者も聞こえる人も結局は同じかなと思います。映画を通して社会や生活を知ること面白い。でもそれだけにとどまらず、映画ならではの表現やアプローチを行っている魅力溢れる映画も積極的に取り上げたいつもりです。ろう者という「耳が聞こえないだけ」と、思いがちです。ですが、ろう者もいけば難聴者もいる、手話や口話、筆談と、人によっても異なる。そして手話は言語のひとつです。国が異なれば手話も変わる。そのことが映画祭で上映される様々な映画をご覧いただくと体感できるのではないかと考えています。

——ろう者である牧原さんは、「音のある世界」をどう感じていますか？

私の感覚は、「この世界には音はある」と思って生きています。自分は聞こえないけれど、音は振動や肌で感じます。ですから、私は音のある世界に住んでいる。けれども、それが本当に「音」なのかは定かではない。なぜかというとその振動は音であると「聞こえる人」に教わるからです。それが本当に音なのかはわからない。「音がない」という考え方は「音」という存在を耳で聞く、聞こ

1986年生まれ。小学2年までろう学校に通い、小学3年から普通学校に通う。大学で臨床心理学を専攻。2017年には東京ろう映画祭を立ち上げ、ろう・難聴当事者の人材育成と、ろう者と聞こえる人が集う場のコミュニティづくりに努めている。現在、会社に勤めながら映画制作、配給などを行っている。

文・井上英樹 写真・大沼ショージ

える人からのマジョリティの視点から生まれたわけで。だからマジョリティであるこの世界に生きる以上、ろう者は「音」という言葉がある世界から出られない。逃げるのも無理。私、個人としては、「音のある世界」は漫画や本、映画から知ることが多くてそういう「聴文化」があるんだと異文化のひとつとして興味深く受け入れ、その中でろう者として生きていくためにどう共存していくかを考えています。

——耳では聞こえないけれど、「音はある」。

ええ、そうです。つまり、一般的に考えると、「音」とは何かを定義づける時に「耳から音が入ってくる人」と、「皮膚や身体で感じる人」のふたつがあるという見方もできるということです。そしてその「音」を切り離す人もいます。映画祭の作品にも、無音の映画もあれば、音のある映画もあります。ろう者でも音楽を付けている監督もいれば、聞こえる人でも無音の映画を作る監督もいる。音についても監督によって考え方が違いますし、観客も補聴器をつけて振動で聞く人もいれば、視覚だけで観るろう者もいる。音についても、東京国際ろう映画祭としては「こうであるべき」というメッセージはない。でもろう者のスタッフが多いので、宣伝動画が必然的に無音になっていく（笑）。映画祭は今後も続きます。様々な観客と共に作り上げていく映画祭でありたいと思っています。

# ART GALLERY

半澤真人〈studio FLAT〉

鈴木涼太郎〈studio FLAT〉

永瀬洋昌〈友愛学園〉

大竹明〈友愛学園〉

鵜木二三子〈しょうぶ学園〉



鵜木二三子さんの立体作品。土のオブジェ「人」／2019年。大きな瞳をもつたるまのようなフォルムに、黒光りする軸葉がかり、ひととき存在感を放つ。

P.15-16：文・岡田カーヤ 写真・大沼ショージ／P.17-19：文・久保田真理 写真・萬田康文  
P.20-21：文・飛田恵美子 写真・斉藤有美



家族への思いとともに  
立体と絵画を行き来する

もともと「土の工房」で、陶芸の立体作品をつくっていた鵜木二三子さん。3年ほど前、施設長の福森伸さんへ宛てた手紙に描いた似顔絵から才能を見いだされ、「和紙／絵画造形の工房」でも絵画作品を制作するようになった。プリミティブな趣が強い立体作品と、少女漫画の影響を受けた大きな瞳の絵画は、一見、同じ作者とは思えない。けれども立像の細部を埋め尽くした連続する模様は、絵画で顔の横に描かれている花のよう。その後も、たびたび職員の似顔絵とともに感謝の気持ちをしたためた紙や土の手紙を送るとともに、職員の似顔絵を描いた絵画に「家族」とタイトルがつけられた作品も制作。キラキラと輝く大きな瞳にじっと見つめられると、心の内を見られているようでドキッとします。



1 職員への土の手紙。表面は似顔絵、裏には手紙が彫られる。2 手書きのテキスタイル「顔」／2019年／帆布にペンキ、水性顔料。3 土のオブジェ「人」／2019年。



2



4

ケヤキ、サクラなどの端材をそのままヤスリで削り、ニスなど塗らずに仕上げ。木を削りたいとの強すぎる思いが作品に向かわせる。無題／サクラ／直径400×高さ300mm／2018年。



木を見ると作りたくなる

木工一筋の人生。薪作り、スノコ制作を通じて木工道具の使い方を身に付けてきた。かつてはノコギリで木を切りたいとの思いが強すぎて、自らもケガをしてしまうことも。そこで、スタッフの発案でノコギリをヤスリに替えると気持ちが落ち着き、現在は木の切り株を使ったオブジェ制作に日々取り組んでいる。近くの家具工場から出る端材のなかでもとりわけ大きなものを選び、2種類のヤスリを使い分けながら堅い広葉樹を一心不乱に削っていく。大竹明さんにとって木の切り株はキャンバスであり、ヤスリは絵筆。もう削るところがなくなり、新しい切り株を求めたら、作品が完成したサインだ。一つの作品に長いと半年間も没頭することも。今まで見たことのないダイナミックなその迫力に、心を突き動かされる。





# 自分らしい表現方法で個性を爆発させる

友愛学園

オリジナリティが突出している。そう感じずにはられない作品に〈工房 YUAI〉で出会い、圧倒された。その工房があるのは、東京都青梅市の社会福祉法人〈友愛学園 成人部〉内の自然豊かな場所。知的障害のあるメンバー60人が、学園内の施設で生活支援を受けて暮らしながら創作活動を行っている。元々は就労訓練を行っていたが、約20年前に陶芸を導入。それには、メンバーの高齢化が大きく影響していた。「仕事をするよりも、自分の気持ちと向き合って1日を楽しく過ごすことを重視したいライフステージになり、自然と創作活動へとシフトしていきました」と同工房で表現活動をマネジメントするスタッフの大矢将司さん。

10年前からはアートの知識があるスタッフを雇用するようになり、表現のフィールドは陶芸から和紙、藍・草木染め、織り、木工、絵画へ。スタッフがメンバー一人ひとりの行動をじっくりと追うなかでヒントを得て、それぞれに合った表現方法を試行錯誤しながら見いだそうとしている。こうして、みんなで同じものを制作するスタイルから、個々の表現を生かす“創作”へ大きくシフトして生まれた



1 大竹明さんの作品。無題／材質不明／直径200×高さ600mm／2018年 2 素材ごとに創作スペースが分かれる〈工房 YUAI〉。3 木の工房で切り株に向かう大竹さんの細い体から、エネルギーがあふれる。4 ひたすらヤスリをかけて木を削る、気が遠くなるような作業。5 作品と一緒に大竹さんを撮影。ポーズを決めて、サービス精神旺盛。

のが、作風が見事なまでに異なる数々の作品だ。カラフルな色づかいの無数のドットが規則正しく描かれたTシャツ、恐竜や特撮もののキャラクターが豊かに表現された焼き物、ヤスリで縦横無尽に削られた木の切り株のオブジェ、色と模様を替えながらひたすら削られたハガキ大の木版画、「イカしようゆ」「カカオチョコレート」と書かれたカリグラフィー。見る者の心を揺さぶってくる。

公募に応募するようになったのは、約2年前から。作品が評価されることに抵抗を感じるという声もあるが、「入賞しなくても、応募するだけでも利用者さんは嬉しいと感じている。だから、利用者さんのために、これからも積極的に出そうと思っています」と大矢さん。メンバーの創作活動が、全ての人に理解されているわけではない。作品が展覧会などに出版されることでスタッフの理解がより深くなり、メンバーとの関係性にも変化が生まれているという。自分らしい表現方法で、黙々と創作に向かうメンバーたち。自分らしく過ごせる毎日が、それぞれの人生を豊かにしている。

〈社会福祉法人 友愛学園 成人部〉東京都青梅市成木2-130-2  
電話：0428-74-4192 <http://yuaiakuen.or.jp/adult/>



6 永瀬洋昌さんの作品。ぞう／セラミック／直径200mm／2018年 7 普段は小さな画用紙を好む永瀬さんが初めて取り組んだ大きな作品。水彩・紙／109×79mm／2018年 8 クマの造形。くま／セラミック／120×200×70mm／2017年 9 絵画の工房で静かに絵を描く。面相筆でスッと線を引き、丁寧に内側を彩色していく。

## 永瀬洋昌 / NAGASE Hiromasa

### 自分らしい表現に出合って

造形、絵画、絵付けと器用になんでもこなす永瀬洋昌さん。彼が手がけるものは、顔が正面を向いている構図になっているためか、どれも愛くるしい。以前は神経質な面もあり、造るもの描くものはもっとリアルなテイストだったそう。その後、自分らしく表現できる方法とめぐり合い、永瀬さんの日常を見守るスタッフとの交流を通じて、作風は優しくなった。造形を手がける時は、パーツごとに形を作って最後に組み立てる、“プラモデルスタイル”で。また、陶芸の絵付けは自身で行い、釉薬は永瀬さんの原画の色を参考にスタッフが掛ける。絵画ではパレットにある12色を細い筆に少しずつ取って調色しながら、独自の色とグラデーションを生み出す。



「フラット」に作品が評価されることを目指して

**木** 曜午後1時、神奈川県川崎市にある障害者支援施設の給食室。その一角で、利用者たちが協力しながら床にシートを敷き、机やキャンパス、画材を並べていく。〈NPO 法人 studio FLAT〉によるアート制作時間のはじまりだ。

〈studio FLAT〉は 障害のある作家たちと絵画や立体作品の制作を行う団体で、主宰するのはアーティストの大平暁さん。2008年、当時の施設長から相談を受け、利用者に絵を教えるはじめた。最初は戸惑いの連続だったという。

「下川慧祐さんという方がいて、彼が描いた下絵に自分がペン入れる形で作品をつくっていたんです。でも、彼はこだわりが強く、少しでも気に入らないところがあると、2時間かけてペン入れた絵も容赦なく消されてしまっ（笑）。やるせない気持ちを抱いていたんですが、あるとき自分が軽い怪我をしたら、下川さんがすぐに絆創膏を貼りに来てくれたんです。言葉や態度に現れてなくても、ちゃんと心は通じていたんだ、と気づきました」

しかし、下川さんは突然帰らぬ人。「もっと早く彼の作品を発表するために頑張ればよかった」という思いに突き動かされ、大平さんはより一層作家のプロデュースに注力していった。現在、〈studio FLAT〉には14人の作家が所属している。2011年から

始めた展覧会「FLAT展」も好評だ。こだわりは、障害のあるなしに関わらず作品を横並びでフラットに展示すること。作品が「アウトサイダーアート」と括られることなく、通常のアートと同じように評価されることを目指している。

今年11月には、新たな挑戦として生活介護事業所を開所する。大平さんは特別支援学校で絵を教える中で、多くの逸材が発見されずにいること、才能を生かせる事業所が少ないことを知り、「卒業後の行き先をつくれたら」と考えた。ギャラリーを併設し、地域に開かれた拠点にする計画だ。「展覧会で作品が目目されると、やっぱり作家さんたちは嬉しそうにするんですね。その光景を日常的なものにしたい。才能のある人が認められ、夢や希望を抱くことができる。そういうごく当たり前のことを現実に行きたいんです」。

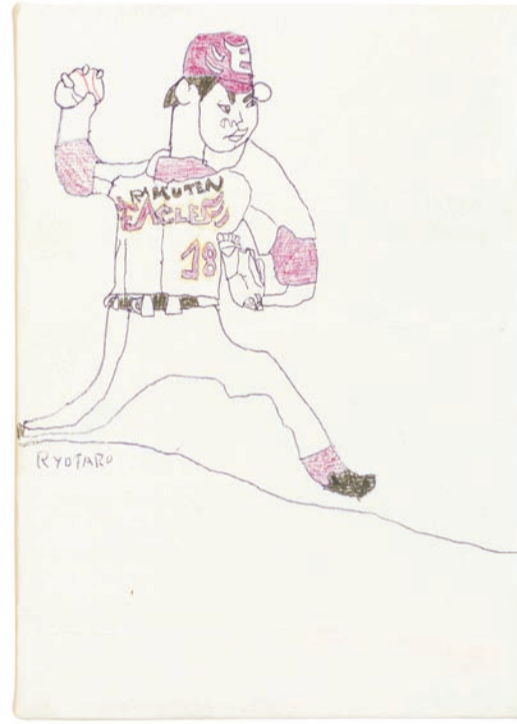
〈studio FLAT〉  
神奈川県川崎市幸区北加瀬2丁目11番1～5号  
コトニアガーデン新川崎 SOUTH 棟3F  
(※2019年11月に生活介護事業所として開所予定)  
電話：090-6499-3977  
<https://studioflat2016.wixsite.com/studioflat/>



1



2



3

鈴木涼太郎 / SUZUKI Ryotaro



1・2「フロンターレの選手」シリーズより／顔料ペン・色鉛筆／160×230mm／制作年不詳 3「マー君」／ボールペン・色鉛筆／150×210mm／制作年不詳 4 スマホを操り、選手が一番かっこよく見える瞬間を探す鈴木さん。

スポーツ選手の  
一瞬を生き生きと描く

勢いよく振りかぶるピッチャー、今まさにボールを蹴ろうとするフォワード。〈studio FLAT〉所属作家の鈴木涼太郎さんが描くのは、スポーツ選手の輝く一瞬だ。難しいポーズも見事に捉えていて、今にも走り出しそうな躍動感がある。大の野球好きでよく東京ドームに観戦に行くという鈴木さん。野球の絵を目にした川崎市長から、サッカーチーム「川崎フロンターレ」を題材に作品を制作してほしいと頼まれ、サッカー選手も描くようになった。「野球のほうが好きなんだけど」といったそぶりを見せるが、制作日にはどの選手のどのシーンを描くかを自分で調べて決めてくるというから、満更でもないのかもしれない。今度、フロンターレの試合を観戦するそうだ。生で試合を観たら、野球と同じ位好きになったりして。

半澤真人 / HANZAWA Masato

まるでひとつの  
生命体のような工場を描く

配管が複雑に入り組んだ工場が、大胆な構図と緻密な筆致でキャンパスの上に再現されていく。動物や家族などさまざまなモチーフに挑戦してきた半澤真人さんが工場の写真を見ながら絵を描いたとき、〈studio FLAT〉主宰の大平暁さんは「これだ!」と膝を打ったという。半澤さんが握る筆先から彩られていく工場は、建造物なのに不思議と生命感があり、観る者の想像力を刺激する。川崎は日本の三大工業地帯のひとつで、半澤さんも小学校の社会科見学で工場に行ったことがあると語る。そうした川崎の地域性や思い出が作品に影響しているのかどうかはわからない。だが、「工場を描くのは楽しいですか?」と聞くと、半澤さんは「楽しいです」と笑顔で答えてくれた。



7  
8



5 写真を参考に描くが、完成した作品は写真とは違った魅力をもたらす。6 木曜午後の2時間が制作時間。7「工場」シリーズより／顔料ペン・アクリル絵の具／160×230mm／制作年不詳 8 半澤さんは父親から絵を教わり、絵画教室にも通っていたという。大平さんのサポートで工場の絵を描きはじめた。





アートは創作したって、おもしろい。

イッセー  
尾形の

# 妄ソ—芸術鑑賞

vol. 01

縦横無尽な妄ソで、見ている人を独自の物語世界へ誘うイッセー尾形さんが、障害のある人たちのアート作品を鑑賞。自由に妄ソの翼を羽ばたかせました。そこからなにが生まれるか？ アートはもっと自由に楽しんでいいのです。

文・岡田カーヤ 写真・平野太呂 ヘアメイク・久保マリ子 作品写真・大西暢夫



イッセー尾形流  
妄ソ—芸術鑑賞 **術**

## 宝物へと近づくため どうやって「溝」を乗り越えていくか。

ネタにしろ、小説にしろ、考えるときは、誰かに話すときのように考えることが多いかもしれない。子どもでも誰でも作り話をするとき、相手の集中力をうかがいながら、相手の興味を引くように話している。もちろん自分がワクワクしないと聞いてはくれないんだけど、そういう相手を想定しながら考えているみたいだね。

僕の妄想のコツは、宝物を遠のかせること。たとえば楽譜だったら、よく見えない楽譜のほうがおもしろいじゃない。ちゃんと見えるものよりも、そこに到達できないもののほうに魅力を感じる。手に取ったら終わっちゃうから、なかなか手にできなくて、その距離を楽しむっていうのかな。だから「どこからその宝物に近づくか」、あるいは「どうやって宝

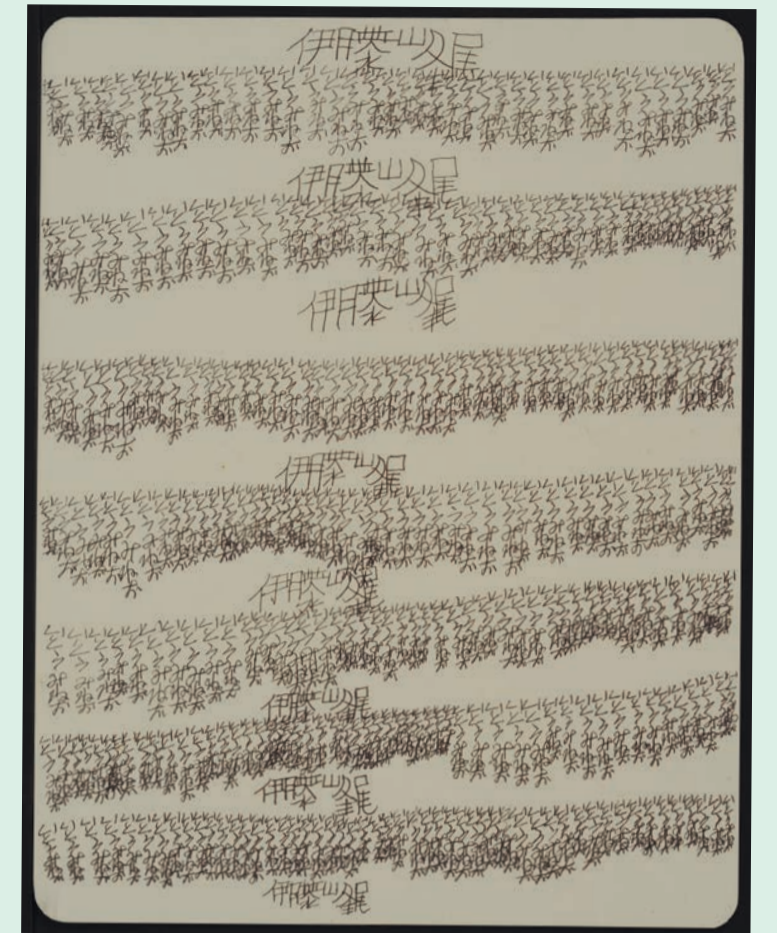
物を遠ざけようか」と考えるのが好きみたい。だって遠ざければ遠ざけるほど、宝物になっていくじゃない。もしかしたら、最初に「宝物」があるわけではなく、「遠ざける」という行為がまずあって、あとから「宝物」が生まれてくるのかもしれない。

宝物がある場所へ行くには、絶対に溝がある。だけどそれは過酷な溝じゃなくて、楽しい溝だね。溝を乗り越えるという行為自体から、悲しかったり、おかしかったり、滑稽だったり、悲劇だったり生まれてくる。そうやって溝を乗り越えれば乗り越えるほど、宝物の輝きが増すというのかな。はじめから、完璧だと終わっちゃうじゃない。ただただ終わらせたくないという思いもあるのかもしれない。

今回の共演者

## 伊藤峰尾 ITO Mineo (1964-)

1964年生まれ、福島県在住。作品に描かれているのは、作家本人のフルネーム。ダウン症の彼に字を書くことを教えたのは父親だった。小学校にあがる前には、平仮名で名前が書けるようになった。2003年に父が亡くなり、サインをすべき書類を目の前にして、伊藤自身が「書く」と言った。漢字で「名前を書く」練習は行為となり、その後も続いた。空き時間ができると、母がとっておいだ洋服や菓子の包装紙に書いた。いったん書き始めると、他のことが目に入らないくらいの集中力で、一文字ひと文字、ゆっくと時間をかけて。



「いとう みねお」／白ボール紙にボールペン／  
245×190mm / 2003～2008年/日本財団所蔵

## 『<sup>これ</sup>楡の木通りの奇跡』

### ロシアの公園に落ちていた3枚の楽譜を 老ピアニストが手にしたことで、物語は始まった。

この作品を見たときは、まさきに楽譜だなと思ったんです。近づくと人の名前だっけわかるんですが、ぱっと見たときの印象を大事に、実際はどうだかはおいておいて。

楽譜といっても、山あり谷ありのものではなく、単調でわりと同じようなメロディなんです。ほら、下のほうにずっとかたまっていて、上はポンポンと同じ間隔で刻まれている。

舞台はロシアのとある公園。季節は秋。そこにほとんど盲目に近い老ピアニストがいるの。名前が、なんかピッチというかな。彼は午後の散歩でこの公園にやって来ていて、ベンチで休んでいる。するとこの楽譜らしきものが3枚ほど、目の前に落ちているのを見つけるんです。

彼はほとんど見えないものですから、ブームスにしろ、チャイコフスキーにしろ、すべての楽曲を暗譜しているんですね。だから見えなくても弾けるんです。そのため最近ではほとんど楽譜を手にしたことすらなかったんですけども、楽譜らしきものが目の前にあるんで手に取ってはみたものの、ぼやとしていただけでよくは見えない。

でもなんだか心惹かれて、うちに持って帰って、ピアノの前にその楽譜を置いて、なんとか読み取りながら弾くんですね。そして覚え込もうと思って、なんべんも、なんべんも練習するんです。けれども、何度弾いてもなにか物足りなさを感じるんです。

彼はロシアではものすごい有名なピアニストなんです。静かな高級住宅街に住んでいて、家のあ

り通りには楡の並木があることから、「楡の木通り」という名前がつけられています。老ピアニストの向かいも高級住宅街なんだけど、そこに外交官の一家が移り住んできたの。その向かい家にはお嬢ちゃんがいるのね。外交官の家庭だから、すぐに転校転校で友達がなくて寂しい思いをしているのだけど、彼女はフルートを習っていて、そのフルートが友達。うまくなったのか、うまくならないか自分でもわからないのだけど、フルートを吹いて、その音を聞いていると心が落ち着く。

ある日、通りの向かいの家からピアノの音が聴こえてくる。弾いているのは、もちろんあの老ピアニスト。彼女は耳を澄まして聞いているのだけど、やっぱりなにか物足りなく感じる。いいのだけれども「肝心のメロディが抜けているんじゃない？」と思うわけ。それで自分で勝手に「このメロディがいいかな」なんて吹いているんですね。耳を澄ませながら小さな音で。来る日も来る日も同じように。すると、だんだんメロディもしっかりしてきて、老ピアニストのほうも暗譜するくらいに弾きこんでいる。

しかしながら老人は耳が遠いから、彼女のフルートの音は聴こえないんです。女の子はピアノは聴こえているのだけど、フルートを吹いちゃうとその音のほうが大いから、ピアノと合わさった音は聴こえない。ふたつの音がちょうどよく聴けるのは、楡の木通りを歩く人たち。右からフルート、左からピアノというように、両側から聴こえてくる。

すぐにこの美しい音楽は評判になり、「そういえばあそこを通ると、いい音楽が聴こえないわねえ」「新

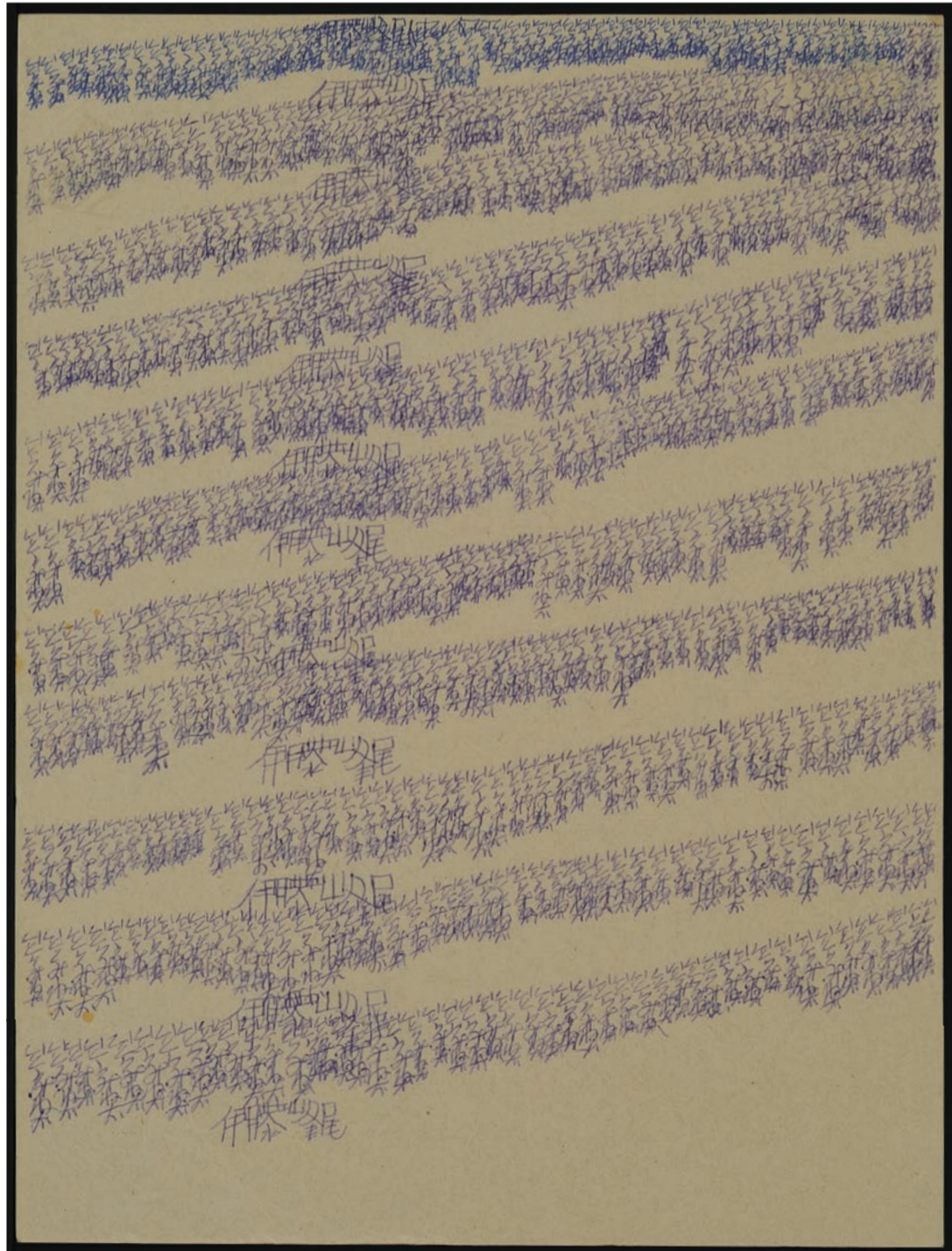
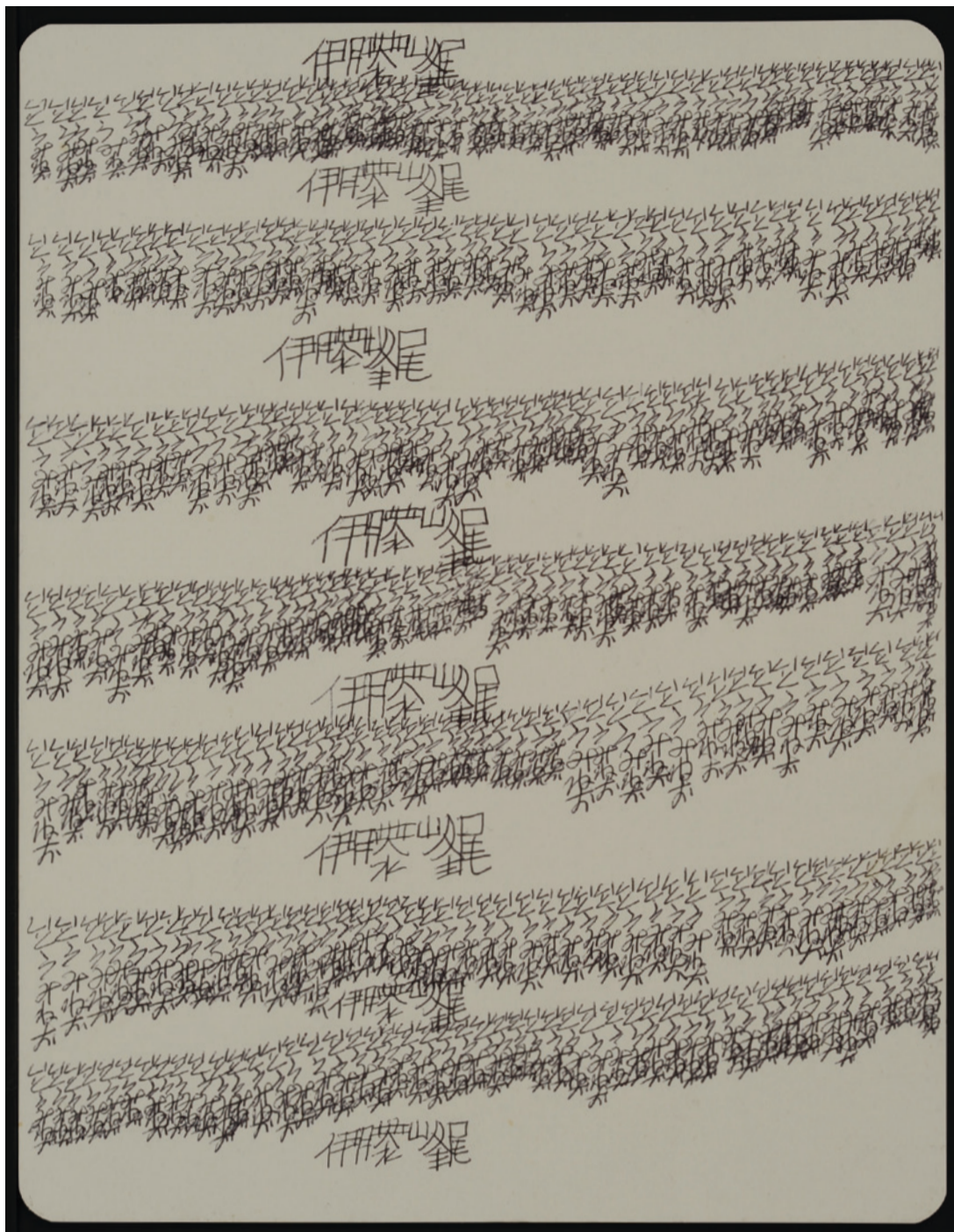
しいわねえ」というように、大評判ではないけれど、ちょっとしたときの話の端にのぼるようになった。「このまま完成できたらいいなあ」、女の子は毎日を楽しんで過ごしていたのだけれども、外交官のお父さんがすぐに別の国に行くことになって、引っ越ししてしまったの。でも、ピアニストはそのことを知らないから、ただただ彼のパートだけをその後も弾き続けている。楡の木通りの住人たちは、もうあの美しい音楽は、聴けないのねと寂しがったといいます。

彼が感じていた「物足りなさ」は、結局埋まらなかったって？ それはやっぱり埋まらないでしょうね。彼の中にも「こんなメロディを合わせたい」というのも生まれたかもしれないけど、なにせほら国立音楽学校をでている真面目な人だから、楽譜通りにしか弾けないの。

そんな妄想をして改めてこの作品を見ると、低音部が混み合っていて、ずしんとくるような低い音が、16分音符のようにデンデンデンと続いている。上のほうに目をやると、高音がティンティンティンと遮断機のような一定のリズムを刻んでいて、まるで人に警戒を呼び起こすような気配もある。いってみればそれは不安な音なのだけれど、だから彼女が吹いたフルートの音というのは、そうした方向とは違う、甘く悲しく切ない、美しいメロディだったのではなからうかと。

そのふたつが合わさった音は、楡の木通りの住人たちが耳にできた。という、ロシアの幻の名曲のお話です。





## DIVERSITY IN THE ARTS PAPER 編集後記

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS は日本各地で表現活動を行う障害のある人たちのアート作品と、それを取り巻く文化を広く紹介しながら、新たなプラットフォームを生み出していくことを目的としています。

2016年6月に創刊した『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』も、今回で06号となりました。今号から紙面を大きくリニューアルしました。これまでの『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』に親しみを感じていただいていた読者の中には、「変わってしまったなあ」と、違和感を覚える方がいるかもしれません。しかし、これまでと変わることがない点がひとつあります。それは、様々な多様性を認め、違いをリスペクトする姿勢です。私たちは「違い」はユニークでかけがえのないものだと考えています。そして、その「違い」の素晴らしさを読者の方に共感していただき、家族や友人、会社や地域の仲間など多くの人たちと共有してもらいたい。その先の物語に大きな期待を寄せています。

06号の取材で、大竹さんという男性に出会いました。彼は木作業場で、ヤスリを手に大きな切り株と向き合い、一心不乱に格闘していました。ゴリゴリゴリゴリと、ヤスリをかける音が部屋中に響きます。やすりは物を削る工具ですが、大竹さんは刀のように用い、その姿はさながら老剣士のような様子でした。大竹さんは言葉を発しませんが、作品をつくる喜びは全身から伝わってきました。工房の外で作品の写真を撮ろうとしていると、大竹さんが現れました。私たちが作品に感心していることに気がついたようでした。「どうだ、これが俺の作品だ!」と言わんばかりに、ヤスリを振り上げてポーズを取ってくださいました。この大竹さんの喜びが紙面から伝われば幸いです。機会があればぜひ、障害のある方の作品に接していただければと思います。私たちは、そのお手伝いをしていきます。この『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』は年に2回発行する予定です。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER  
編集長 井上英樹

DIVERSITY IN THE  
ARTS TODAY



第1刷発行：2019年9月1日  
第2刷発行：2022年6月1日  
発行元：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS  
住所：東京都千代田区神田神保町1-6 神保町サンビルディング4F  
電話番号：03-5577-6627  
編集：井上英樹、岡田カーヤ (MONKEYWORKS)  
アートディレクション & デザイン：TAKAIYAMA inc.  
校正：鶴来堂  
印刷：朝日プリンテック